

1. 授業のねらい・概要

開発経済学とは、国家が経済的に発展するあらゆるプロセスを分析し、低所得に悩まされている途上国の発展戦略を明らかにすることを目標とする研究分野であるが、実際、そのような発展戦略は必ずしも万能であるとは言えない。むしろ、現在の途上国の多くが、第2次世界大戦後に低所得のまま独立したにも関わらず、グローバル化が一層進展していく中、ブラジル、インド、中国、東南アジア等の新興国が高度な経済成長を見せる一方、多くのアフリカ諸国等のように、目に見える開発の成果が上がっていない国々も存在するという現状には注目すべきである。したがって、開発経済学においては、単に経済成長の要因を探るだけではなく、政府開発援助（ODA）のあり方、対外債務問題、教育の役割、環境と開発の両立、BOP ビジネス等、より幅広い観点から、途上国の発展戦略を多角的に考察することが大変重要になってきている。以上を踏まえ、本講義では、①開発援助を通じた国際協力のあり方、②途上国の経済・社会問題の多面的側面、③途上国開発における日本の果たすべき役割、の3点を中心に考えながら、それらに関連する基本的知識を可能な限り伝授する。

2. 授業の進め方

学生諸君が興味を持ってくれるような講義とするべく、映像視聴を取り入れたり、担当教員の実務・海外経験を話に交えたりする等の工夫を凝らす。さらに、より主体的な姿勢がより良い理解に繋がるので、日頃から、メディアで世界の経済・社会情勢をフォローしておくことを強く薦める。また、数回、受講生に小課題を課すことで、理解度を確認することとしたい。

3. 授業計画

1. イントロダクション	9. 貧困の捉え方とその実態
2. 経済発展の要因とメカニズム	10. DVD 視聴（フィリピンのスラムの実態）
3. ODA と開発援助政策①（日本）	11. BOP ビジネスと開発
4. ODA と開発援助政策②（国際社会とその他諸国）	12. 開発における教育の役割
5. 国際開発金融機関の概要とその役割	13. 持続可能な開発と環境問題
6. 開発経済学の変遷	14. ジェンダーと人間の安全保障
7. 開発援助の効果と評価	15. 本講義の総括
8. 対外債務問題と構造調整	

4. 到達目標

世界経済の状況が必ずしも一様ではない中、成長から取り残され、貧困に苦しむ途上国が歩むべき道をどのように模索するかにつき、幅広い観点から理解することで、グローバル化の実態を捉える複眼的思考を養うことを目標とする。

5. 準備学修に必要な時間、またはそれに準じる程度の具体的な学修内容

レジュメを当日配布するため、準備学習は不要だが、むしろ、講義内容を振り返りながら、復習を行うことが重要。

6. 成績評価の方法・基準

平常点（30%）及び期末試験（70%）にて、総合的に評価する。

7. テキスト・参考文献

テキストは特に限定しない。毎回の授業時で必要なレジュメを配布する。参考文献は、講義の中で適宜紹介していく。

8. 受講上の留意事項

「グローバル化と国際社会 A・B」や「日本とアジアの経済」を履修していることが望ましいが、必須条件ではない。講義中は、私語は慎み、解説を聞くだけでなく、補足情報もノートすること。平常点が著しく悪い場合は、期末試験を受験できないことがある。また、留学生には、経済学の基礎文献を読める程度の日本語能力が求められる。